

加藤辨三郎 述

歎異抄

12

文責 本誌編集部



法を聞きたいせつさ

前述したように『歎異抄』の終わりに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり」と出てきます。

親鸞聖人は、弥陀の本願はこの親鸞一人を助けんがためであると御受けとりになられたのです。しかも、それは一切衆生を救うところの道であります。ゆえに、一切衆生が救われる道だから、初めてこの親鸞も救われていくのだと

おおせられています。親鸞聖人は、常に衆生のなかの一人としていられる。むしろ下の下と思われていたのでありましょう。その下の下を目標てに立てられた本願なのだから、親鸞聖人が「本願のかたじけなさよ」と述懐されたのは、当然のことでありましょう。

そのように、罪悪深重ということも、煩惱熾盛も、自身身の身に受けていらっしゃるのです。私どもは、一にも二にも、そこを学ばなくてははいけません。いずれの行も及びがたいのですから、もう本願におすがりするしかないこ

とを、よくよく悟らしてください。やはり私たちはお互いに機です。法を聞けばわからしてただけるのです。それゆえに、法を聞くことがたいせつです。

そういう次第で唯円は、「よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」とおおせになつてゐるのは、当然ではないかといつてゐるのです。

最後に「おほせさふらひき」とあります。第一章、第二章は「云々」と書いてあつて、これだけが「おほせさふらひき」とあるということで学者の間で、いろいろ論をされています。そういう論は私たちはすべきではないが、この第三章を読んで、自分が善人か悪人かと、自分が問題にならなくては駄目です。現に、名利の大山に迷惑し、愛欲の広海に沈没しているのです。ですから親鸞聖人は、「かなしきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して……真証の証にちかづくことをたのします」と、まったく私自身の問いに説かれていられるのです。

前述しましたが、『観無量寿経』の最後の下品下生なんかも、私は長いこと人ごとにしか聞いていませんでした。世のなかには、いいことを一つもしないで、悪いことばかりする、そんな人もいるのだぐらいに思っていました。だ

から『観無量寿経』を読んでも、何かわかつたような、わからぬような、何ともいえずにいました。しかし、念佛の話をだんだん聞いているうちに、なんだ、下品下生、下の下は私のことだと気づかせられたのです。上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中をやってみろ、おまえにはやれるかといわれたら、やっぱりかないませぬ。なんのことはない私は下の下の人間だと気づいた。それも五十歳ぐらいになつてからで、ずいぶん遅く、まことにお恥かしいしだいです。遅まきですが、下品下生は、この私で、私を教えんがために『観無量寿経』が説かれたのだと思うようになりました。

縁の依つて来るところ

ところが、ありがたいことには、そうなるると一種の落ちつきが出ます。下の下ですから、もう落つこちようがありません。これを助けたまわんがための本願、お念佛です。それを『観無量寿経』には鮮やかに書いてあります。

如来の説法を聞いていた韋提希夫人をはじめ、五百人の侍女たちは、最後の下の下を説かれるまでは、みんな自分はまだ多少の余裕があると思つてゐたのです。しかし、下

の下が説かれて、それは私だっと思ったものではありませんか。喜悟信の三忍、つまり喜びと悟りと信心とが、一遍に、ばあっと胸が開けて、破天荒開豁の世界に出たわけです。

これが本願を信じ、念佛を申す教えであって、第三章は、極めて短い名文をもって語っているのです。この「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」の言葉を、ときどき思い出して復唱すると、心にぴんと響くものがあると思います。悪いことをした場合、みんな出来心とか、魔が差したとかいいいますが、これは逃げ口上であって、よくよく考えてみると、その因縁は実に深いところからきているのです。

今日の生命化学でもはつきりいえるのです。DNA、遺伝子というものがある。これは生きとし生けるものの共通の構造です。アミーバも私たちも、まったく共通のもので、それがいわゆる進化の経過の途中で、同じ形でありながら、複雑に枝葉がついてくるのです。人間のDNAをつぶさに研究していくと、いつごろ恐竜であった、いつごろは蛙であったということがわかるのではないかと興味ある説をする人もいます。これはわかりそうに思います。どこ

かよく探すと、あ、これは恐竜からもらった遺伝子だ、これは蛙からきた、これは鳥だ、これは猫だなどとわかるかも知れません。遺伝情報はまったく面白く摩訶不思議な情報であって、こういうことを学者が説くようになったほど、私たちの遺伝の深さは無限なのです。

われわれの罪悪もこれと関係しています。簡単に出来心が出るとは思いません。やっぱり依って来るものがあります。どんな悪いことにも必ず因と縁とがあるのです。悪いことを、どんなに秘密にやっつて、人にはわからないようにしても、本人には、ちゃんとわかっています。しかも、本人でもわからない、気がつかない深いところから来ている恐ろしさがあるのです。罪の深さを論ずると、われわれの罪悪意識の根源には、宇宙開闢よりもっと前からさかのぼらなければなりません。

それをそのままにしていて、ごっそり救おうというのが本願の教えです。私たちは善悪にさいなまれております。自身の心のなかでも善悪の葛藤であります。他との争いも、善だ悪だということからの争いです。善悪の葛藤の代表が愛と憎しみです。

それが、南無阿弥陀佛を称えよ、しからばおのずと開け

るとの教えなのです。それを信ずるといふことは、われわれの生活に根底的な力が与えられるわけであり、これが一番如実にあらわれるのは耐える力であり、あるいは柔和忍辱の姿ともなるのであります。

智慧と慈悲

つづいて第四章に移りたいと思います。

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるること、きはめてありがたし。また浄土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし。しかれば、念佛まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云々。

徳川末期の人で『歎異抄』の研究をされた三河の了祥師の説にしたがうと、第一章、第二章、第三章は、浄土真宗

の信心の意味を書かれていて、それにつづく第四章、第五章、第六章の三つは起行——つまり信心とか念佛が、われわれの日常生活にどういふ働きをし、どういふことが起ってくるかということです。それはそれとして、この第四章が、どういう意味であろうか、われわれ自身がこれをどう受け取ったらいいか、味わうべきだと思ふのです。

そこでまず、この慈悲という言葉ですが、日常語で私どもはわかっているように思っています。だが、佛教で慈悲というと簡単ではありません。私たちが簡単に慈悲といっているのと、およそ深さが違うことにすぐお気づき

清酒製造業

櫻酒造株式会社

取締役社長 高岡茂久

本社 城東工場

〒669 24

兵庫県多紀郡篠山町井ノ上一八二の一

電話

(〇七九五) 五六一三・一五八

明石工場

〒674

明石市大久保町西島字出張一〇〇一の四

電話

(〇七八) 九四六一・〇〇四三

になると思うのです。佛教はぎりぎりのところは智慧と慈悲を説いているのです。その智慧も、仮に分析的に学ぶとなると、浅いところから深いところまであるに相違ないと私は想像いたします。

子供の生まれたては、ほとんど虫と変わらないくらいで、表情も何もない。それがだんだん目が見えて、耳が聞こえてくる。するとニッコリ笑うようになる。また物を取ろうとする。あるいはハイハイをしてお母さんのところへ行こうとする。これを見てお互いに大分智慧がついたなといっています。あれも智慧に違いありません。彼らは物を覚えたとか、本を読んでどうしたとか、いわゆる知識を得たとはまだいえません。むしろ智慧が湧いたとか智慧が出たとかいうものでしょう。

ところが、深い智慧は、佛教では最後の段階で般若の智慧といえます。般若はもとの梵語で、智慧というのです。だから智慧は般若のことです。それを日本語で般若の智慧といつて教えています。その般若、これは覚りで、お釈迦さまが正覚を得た、覚りを得たとおっしゃったのは、般若の智慧が出たということです。佛教はここから出発していますから、般若の智慧が根本です。般若の智慧を、たとえば

空を知る智慧とか、あるいは縁起の道理を知る智慧とかいえるのです。

しかし、般若の智慧を得たのが佛さまなのです。われわれでも、もしどうかして般若の智慧を得たなら、佛といわれるだろうと思いますが、幸か不幸かそこまでわれわれは行っておりません。行けそうもございませんが、しかし想像はつきます。

同じように、慈悲もいろいろに説かれています。慈悲には、衆生縁と法縁と無縁の三縁があるといわれます。この三縁の慈悲は、親鸞聖人も『教行信証』に数か所引いておいでになります。

宇井伯寿先生の辞書を引きますと、三縁の慈悲が、もう一つ分け方があります。その第一の分け方は縁感分別、縁を感じて分別していく心を起こす慈悲。縁を分析的に感じ取って、衆生の縁だとか、法の縁だとか、無縁の縁だとか差別していく。それは総じていえば、まだ小慈である。そのなかに衆生縁と法縁と無縁の慈悲があると説かれています。二番目の分け方は、縁感分別することなく、自然にあらわれるところの慈悲が大悲だといわれています。

(元協和醱酵工業株式会社社長・前在家佛教協合理事長)